反核医師の会ニュース

HANKAKU ISHI no KAI News

Physicians Against Nuclear War（PANW）
核戦争に反対する医師の会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5
新宿農協会館　全国保険医団体連合会内
電話 03(3375)5123　FAX 03(3375)1885
e-mail: panw@doc-net.or.jp
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

核兵器も核のごみもないピリカ・アイヌモシリ（美しく静かなる大地）を未来へ

反核医師のつどい in 北海道 9月23日（土）～24日（日）開催

「第33回　核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい」の開催にあたって

実行委員長　平野　哲夫
（北海道反核医師の会会長代行）

3年にわたった新型コロナウイルス禍のもと、ウクライナへの軍事侵攻の膠着と核兵器の使用の可能性、北東アジアでの軍事緊張、わが国におけるほとんど議論がないままの憲法改悪の動きと軍備拡張と厖大な防衛費増、国内では生活苦の進行と民主主義無視の強権的政治、原子力発電の拡大と再稼働・福島原発事故の汚染水海洋投棄・北海道における核のゴミ処理問題の進行等々、緊喫な課題が山積し対応を求められ、日本が戦争する国へと進もうとしている厳しい状況にあると考えます。

60年前のキューバ危機の際、米軍・ソ連が共に核兵器発射ボタンを押す寸前になっていた事も思い出し、唯一の戦争被爆国として、広島・長崎の惨事を忘れてはなりません。

これまで反核医師の会全国集会を、2004年・2013年と過去2回北海道で開催していますが、昨年の兵庫県に続き、本年9月北海道で開催できることを光栄に思い、現状に即したテーマを設定し皆様のご期待に応え準備したいと考えます。

春の十勝岳連邦

北海道反核医師・歯科医師の会は、1989年6月に創立以来種々の活動を行ってきましたが、今回の全国集会開催のお手伝いができることを嬉しく思っています。

皆様の協力をいただきながら、多数の方々の参加をお願いし各分野のエキスパートの講演やシンポジウムなどを通じ、現状にふさわしい内容で今後の展望が開けるものとして準備できればと取り組んでいます。

また、今後の運動を担ってゆく若い方々の沢山の参加を願い、その方々への企画も準備中です。

秋の北海道は、観光シーズンでもあります。連休を利用して、集会と観光なども時間があれば楽しんでいただけるのではと考えております。

多数の皆様のご参加をお待ちしています。

「反核医師のつどい2023 in 北海道」の準備状況

実行委員会事務局長　塩川　哲男（常任世話人）

会場のＡＮＡクラウンプラザホテル札幌

2023年か24年、北海道で反核医師のつどいを開催できないかと全国反核医師の会（ＰＡＮＷ）より相談があり、昨年９月29日の北海道反核医師・歯科医師の会拡大運営委員会で議論され、賛成意見が多かったため、開催を受諾する方向で検討することになりました。

役員・事務局員への意見聴取を行い、引き受けるなら来年が良いのではないかとの意見が多く出されたため、11月3日の本会総会で、２０２３年秋に第33回反核医師のつどいを北海道で開催することを確認しました。

過去2回（第15回＝２００４年10月と第24回＝２０１３年９月）、札幌市内で開催しましたので、北海道での開催は今回で３回目、ちょうど10年ぶりの開催となりますが、ＰＡＮＷの指導や協力も得ながら必ず成功させたいと決意しています。

これまで3回の実行委員会をオンライン併用で行い、メインテーマや内容を検討してきました。３月20日現在、決まった事項は以下の通りです。

医学生や若手医師にも多く参加してもらうべく、北海道の会の若手研修医（３人）にも実行委員会の中心メンバーになってもらっています。

本番まであと５ヶ月、全国のみなさんのご協力と参加をお願いする次第です。

■日程　2023年9月23日（土、祝日）午後2時から24日（日）午後1時まで
■会場　JR 札幌駅近くの ANA クラウンプラザホテル札幌
■昨年の兵庫でのつどいと同様、現地＋オンラインのハイブリッド形式で行います
■メインテーマ　核兵器も核のごみもないピリカ・アイヌモシリ
（美しく静かなる大地）を未来へ
■記念講演　孫崎　享さん（外交官、評論家）
「世界と北東アジアの平和に何が必要か」（仮題）
■教育講演①　川崎　哲さん（ピースボート共同代表）
「核戦争の危機のなかで核兵器のない世界をどうつくるか」（仮題）
■教育講演②　被爆者運動の継承
演者は未定
■シンポジウム　放射線被曝や原発問題
（核のごみを含めて）　演者は未定
■医学生・若手医師の交流企画　１日め夕方
■懇親会　１日目の夜に立食形式で行います
このなかで文化企画を検討中

お知らせ

現地参加を希望のみなさんへ

宿泊は実行委員会でも若干確保していますが、現地参加の方は早めの独自確保をお願いします。

ガンマ線

亡くなった祖父は永井隆博士からもらった手紙を大切に保存していた。祖父は長崎医科大学で博士の1学年下、同じ籠球部だった。原爆が投下された時は軍医として大陸に出征しており難を逃れた。

手紙の差出住所は現在の如己堂のある上野町で、消印は昭和22年9月2日となっている。この頃永井博士は既に病床に伏しておられ、闘病中の見舞いや激励のお礼として、多くの和歌、俳句、短詩を織り込んだ手紙を書き送った。祖父への手紙もそのうちの1通だったと考えられる。

「4年ぶりに　会いたる友よ　友なれば　昨日今日の　話のみにて別れぬ」4年ぶりに再会し近況のみを交換した、短いお見舞いだったのであろう。

「焼原に手水鉢の如く　ころがりて　友の情に　つなぐ命かな」

手水鉢は神前、仏前で身を清めるための水をいれた器で、茶の湯では「つくばい」とも呼ばれる。永井博士は白血病のために寝たきりで動けぬ我が身を手水鉢になぞらえている。手紙は、「昔と変わらぬ御元気の様子をみて喜びました。僕もがんばります」

「玉の緒の命の限り　吾は行く　しずかなる　真理探究の道」と結ばれている。永井博士は自分の生きる道を詠んだこの句を好み、石に刻んで、病床兼仕事場の如己堂の前の庭に置いていた。

如己堂は敬虔なクリスチャンだった永井博士が聖書の一節「己の如く隣人を愛せよ―如己愛人」という言葉から命名された。

世界的に戦争の緊張が高まる今。永井博士の言葉を噛みしめたい。

（K・H）

長崎の「黒い雨」国は認めず

2021年7月、広島「黒い雨」訴訟の広島高裁判決に対し国は上告を断念。菅義偉首相（当時）は原告と同じ事情にあった者を被爆者と認定し、救済する談話を閣議決定した。しかし、国はあくまで「黒い雨に遭った」者を救済の対象とし、長崎は該当しないとした。

これに対して長崎県は2022年2月、専門家会議を設置し、国が長崎を除外した根拠について検討した。そして同年7月、「長崎で黒い雨に遭った者を被爆者健康手帳交付の対象とすることは、過去の被爆体験者訴訟判決と何ら矛盾するものではない。」「長崎において、被爆地域である西山地区以外で原爆投下後間もなく降雨があったことに関し、「平成11年度原子爆弾被爆未指定地域証言調査証言集」は、客観的な記録であると言える。」との報告書（長崎報告書）を取りまとめた。

2022年4月、「黒い雨に遭ったこと」を要件とする新しい審査方針のもと、広島で被爆者検討手帳の交付がはじまった。長崎県、市は専門家会議の報告書をもとに、長崎も救済の対象に加えるよう国に求めたが進展はみられなかった。

2023年1月、厚生労働省は長崎報告書に対して、「過去の被爆体験者訴訟との整合性がない」「被爆地域以外での降雨があったとする客観的事実がない」ことより、改めて長崎を救済の対象とすることはできないとの見解を示した。

広島高裁判決は黒い雨に含まれる放射性降下物の内部被曝による健康被害の可能性を認め、原告を被爆者と認めた。広島と違って長崎では米国マンハッタン調査団により広い範囲で残留放射線が測定されている。ところが、どうしても内部被曝を認めたくない国は「黒い雨」にこだわった。広島では黒い雨に遭ったので手帳を交付する。長崎では放射性降下物で被曝したことが証明されても黒い雨に遭っていないので手帳は交付しない。合理性も科学的根拠もあったものではない。無茶苦茶である。

長崎県保険医協会は抗議文を出した。一日も早い誰もが納得できる解決を望みたい。

本田孝也（常任世話人）

「核禁条約への署名・批准を」

外務省要請を実施

担当者（右）に要請書を渡す原代表世話人（中央）と中川代表世話人（左）

例年行っている外務省への要請を12月15日に行った。今回、保団連から住江憲勇会長、永瀬勉非核平和部長、矢野正明担当理事、反核医師の会から中川武夫、原和人各代表世話人、近畿反核医師懇談会から武田勝文医師（大阪）、松井和夫医師（和歌山）と、事務局員6人が参加した。

外務省からは軍備管理軍縮課町村敬太課長補佐等が対応し、こちらが事前に提出した質問事項ついては、「我が国の周辺には強力な軍事力があり、その脅威に対して米国の核による抑止力が必要」、「核禁条約は核のない世界の出口として重要であるが、核兵器国の参加が必要」、「核兵器の先制不使用は検証可能な状態での同意が必要」、「米国との核共有は非核三原則と相いれない（核拡散防止条約にも違反する）」との回答であった。

その他、いくつかの論点について意見交換を行った。

国連総会での日本決議は、今回初めて核禁条約に言及し、核戦争の非人道的結末などにも触れたにもかかわらず、各国の支持は例年並みだったことについて、外務省からは「ロシアのウクライナ侵略、国の安全保障の危機、核兵器国の立場の相違などが各国の投票行動に影響し、単純に過去と比較することは適切ではない」という見解が示された。日本決議が核禁条約にふれた理由については、「NPT再検討会議での最終文書案に言及されており、事実を記載した」と説明があった。

米国が核兵器の先制不使用の方針を検討した際に、日本が反対したと報じられていることに関しては、「コメントできない」との回答であった。こちらからは、日本政府が二度と核兵器が使われてはいけないという見解であれば、米国に対しても、核兵器の先制不使用の方針を推進するように要請するのが戦争による唯一の被爆国としての立場ではないかと意見を述べた。

核軍縮について「現実的かつ実践的に対応していく」という説明に対して、どのようにして橋渡しをしていくのか、核抑止力の立場に立つと、核を持たない国も自国の安全のために核兵器を持つことになるという意見が出された。これに対し町村氏は「日本としてはNPTに基づく核兵器の不拡散という立場で、安全保障に対応していきたい」と述べた。

原和人（代表世話人）

韓国反核医師会（DAN）の代表が訪日

交流会終了後の記念撮影（右端からパク運営委員、１人おいてウ医師、キム医師）

2月2日から5日にかけて、DANのウ・ソクキュン医師、キム・ミジョン医師、パク・チャノー運営委員の3人が訪日した。これまで反核医師の会（PANW）は3度にわたり韓国を訪問し、また、福岡や長崎で開催された「反核医師のつどい」に招待し、さらに日本で開催されたIPPNW会議の際に交流を行ってきた。日本滞在中、全日本民医連との交流、原子力市民委員会への訪問、立川相互病院の訪問と東京反核医師の会との懇談などを行い、2月4日の17時から2時間半、リモートで反核医師の会との交流を行い、約10人の会員が参加した。

DANはもともと東日本大震災の東電福島原発事故の後、韓国で核発電所（原発）に反対する組織として発足した。従って、その活動は、反原発や原発による健康障害に対する支援が中心である。

韓国でも、使用済み燃料などの高濃度廃棄物の処理が問題となっており、現在では原発の敷地内に永久保存する方法が検討中で、日本と同様、原発の運転期間の延長も論議されているという事であった。

韓国では原発周辺の住民に甲状腺がんの多発が指摘され、裁判闘争が行われている。昨年一審が終わり敗訴になったが、第二審に向けて準備している。その点で、東電福島原発事故に対する健康障害についての関心も高く、小児の甲状腺がんの問題についても、意見交換を行った。

最近、ユン大統領は韓国が独自に核兵器を保有することもありうるという発言を行ったが、それについても意見交換を行った。韓国においては核兵器禁止条約やNPTについて話題にされることが少なく、米国との核共有も含めて、核兵器の保有に対しては7割の国民が賛成している。ただDANを含む市民団体は、朝鮮半島の非核化、核のない世界に向けて運動しており、これからも日本と韓国の共同した運動で、北東アジアの非核化に向けて運動を強めなければならないことを確認した。

原和人（代表世話人）

反核医師の会学生部会　３年ぶりフィールドワーク

1月7～8日、反核医師の会学生部会フィールドワークが3年ぶりに開催された。今回の開催地は広島で、学生を中心に52名が参加。参加者らは大久野島や広島市の遺跡を巡った他、現地の被爆者団体と交流し見聞を深めた。以下に当日参加した学生の感想を紹介する。

52名が現地参加

広島フィールドワークの感想

沼口　護（福島県立医科大学3年）

今回は、前年9月の広島フィールドワークが台風で中止になったことを受けて、反核医師の会主催で行われました。自分は一部員として、場を盛り上げないといけないと思っており、緊張していましたが、実際始まってみるととても楽しかったです。

1日目

広島市から電車で1時間半ほどの場所にある「大久野島」に行きました。うさぎでとても有名な島ですが、実はこの島では戦時中に毒ガスを作っていたのです。戦争兵器としての毒ガス使用はジュネーヴ条約で戦前に禁止されていたにも関わらず、中国などで使用されて戦地で何万、何十万という人たちが亡くなりました。

山内さんというガイドの方と見学して、たくさんの衝撃的な話を聞くことができました。話の中でも、「大久野島は地図から消され、電車からも鎧戸で閉められて見えないようになっており、確実にこの事実は隠蔽されていた」、「関係資料をすべて廃棄したために、後でこの事実が語られることもなく、同じような悲劇が繰り返される可能性が少なからず残っている」、「毒ガスを作る過程でもたくさんの方が毒ガスの漏洩などで亡くなった」、「最終的に子供まで動員されて毒ガスを作っており、毒ガス工場で働いている」、「話を漏らすと死刑もあり得るという脅しを受けながら働いていた」、「最終的に毒ガス工場を埋める際に土を被せただけで、まだ地下1mには当時の痕跡や汚染されていた土が残っており、島の水道はヒ素などの毒が問題でわざわざ水を他の場所から運んでくる必要があるなど、本当に戦争が終わったとは言えない」など様々な言葉が心に残りました。

見学の中では、毒ガスを何百トンと保管できる島内最大の貯蔵庫の大きさが印象的でした。また、実際に当時使われていた発電所を見て、特別に中に立ち入ることができました。

当時は外部からの隠蔽のために外から電気を直接取り入れることができず、そのために立派な発電所を作ったそうで、島内の仕事の中で発電所の仕事は毒ガスに接触しなくて良いために人気があったという話には納得できました。

大久野島発電場跡を見学する参加者

1日目夜の交流会では、それぞれ班ごとに分かれて交流を楽しむことができました。自分の班では平和に関する話から、社会に残っているあらゆる差別のことに話題が発展し、自分達の周りにも気づかないうちにたくさんの差別があり、その差別を知らないうちに作ってしまっているということは、1人ではなかなか気づくことのできない新しい視点になりました。

2日目

当時広島にいて爆心地1km以内で実際に被爆された方の話を聞きました。自分は昨年9月に広島へ行った際に、胎内被爆された方の話を聞くことはできましたが、直接被爆された方の話を聞くのは初めての経験になりました。原爆が落とされたあとに気を失い、一緒にいた家族を原爆症で次々に亡くし、また本人もひどい症状をきたして、大変辛い思いをされたことが伝わってきました。1日目の大久野島見学でも二度と戦争を繰り返してはいけないと思いましたが、改めてそれを強く感じることができました。

今回、フィールドワークの最後に見学した平和祈念資料館では、原爆の凄惨さが伝わってくる様々な展示物、当時広島の市街地が焼け野原になってしまった際の写真、そして被爆して原爆症で亡くなっていくまでの被爆者の記録などを見ました。偶然、原爆投下時に爆心地周辺にいなかったなどして家族や友人を亡くしながらも生き残った方は、後ろめたく、生きているのを逆に辛く感じているということや、原爆症で血を吐いたり、髪の毛が全て抜けてしまったりなど、被爆者は非常に辛い思いをしたことなどが伝わってきました。

いま、自分たちは当たり前のように生活ができていますが、当時はいつ餓死するか、また爆弾が落ちてきて命を落とすのか、それに政府からの情報統制など、怯えながらの貧しい生活を長期にわたり強いられていたこと、そして1945年8月6・9日に、たった2つの原子爆弾で合わせて20万人以上もの方が命を落としたことを考えると、今当たり前にできていることは昔は全く当たり前ではなく、私たちはありがたいと感謝しながら生きていく必要があるとも思いました。

読書案内

漫画「はだしのゲン」を子どもたちに

（汐文社　中沢啓治　作）

広島市教育委員会が「ひろしま平和ノート」という教材の小学3年生向け資料から「はだしのゲン」の削除を決定した。「ゲン」は、原爆の恐ろしさを漫画という子どもも理解できる表現で伝えている。皮膚が垂れ下がるほど火傷を負った被害者の様相を伝える絵が残酷だという意見もあったが、それが原爆なのである。高温でそこにいた人間が蒸発してしまうほどの非人道的な武器なのである。10巻にも及ぶ「はだしのゲン」を読んだ時、なぜこんなに長いのだろうと不思議だった。しかし、読み進むうちに納得がいった。被爆だけなら1～2巻で十分であるが、その後の被爆者の人生が延々と描かれている。生き残った人たちも放射能という目に見えない力で破壊され、若くして人生を終える。一生懸命生きているにもかかわらず、被爆者というレッテルが生活しづらさを生み、ついてまわる。被爆者の真実を描くために10巻が必要だったのだ。

核戦争を防止する石川医師の会では、核廃絶運動を広げていくために、2011年から、石川県内の小中学校に「はだしのゲン」寄贈運動を続け、これまで94校に寄贈してきた。子ども時代から平和の尊さを知ってもらう為には、戦争の恐ろしさ、特に核戦争の恐ろしさを、かつてその当事国として体験した日本は先頭に立って押し進めることが義務であろう。

3月7日夕方、家を出たとき、車のフロントガラス越しに満月が真正面に輝いていた。美しい。50年後、壊れかかった地球を後に、地球難民が満員のロケットに乗って月に向かっている姿を想像した。正夢にならないように祈りたい。

（核戦争を防止する石川医師の会世話人　武藤一彦）

『はだしのゲン』（作：中沢啓治　汐文社）

日米両政府に搾取されつづける沖縄

近畿反核医師懇談会がオンライン企画を開催

松岡哲平氏

近畿各府県の保険医協会や民医連、反核医師の会などでつくる近畿反核医師懇談会は2月23日、市民公開オンライン企画「沖縄と核～恐怖と隣り合わせの島で～」を、大阪市内とオンラインで開催。NHK広島放送局ディレクターの松岡哲平氏が講演し、78人（会場32人、オンライン46人）が参加した。

松岡氏は、沖縄放送局時代の2015年、「沖縄と核」をテーマに取材を重ね、米軍占領下の沖縄が核戦略の拠点だったことを明らかにし、NHKスペシャル「沖縄と核」を制作したと紹介。

そもそも沖縄に核が配備されるようになったのは、50年代、アイゼンハワー米大統領のニュールック戦略のもと、米国が日本本土への核配備を狙ったが、日本本土ではビキニ水爆実験被害により反核運動が盛り上がり本土への核配備の拒否感が強い一方で、沖縄への核配備への抵抗は少なかったことから、米国と日本政府の利害が一致したことによると紹介。

伊江島での核爆弾投下（LABS）訓練のための土地接収や、核弾頭を積んだ迎撃ミサイル「ナイキ・ハーキュリーズ」の誤発射、中距離攻撃ミサイル「メースB」がキューバ危機の最中、中国に対して発射される寸前であったことなど、沖縄に核が配備されていたことにより、住民は常に危機と隣り合わせの状況にあったと丹念な取材資料から示した。

松岡氏は、沖縄の本土復帰で核兵器は「すべて撤去」されたということになっているが、その後も核持ち込みを認める「核密約」が日米政府の間で存在していたことが明らかになっており、現在も沖縄には在日米軍基地の大部分が置かれ、日米両政府が沖縄を搾取し続ける構造は一切変わっていないと指摘。

そして、日米両軍より多い住民10万人超が犠牲になった沖縄戦がその構造の原点と考え取材を重ねた結果、「米軍の爆撃により死亡した住民」とされていた写真が、実は映像が残っていないと言われていた集団自決により亡くなった住民であると明らかにしたと報告。NHKでは「残酷すぎる」と詳細が放送できなかったが、当時を証言する人がいなくなるなか、沖縄戦の凄惨さ、背景にある日本軍の思想教育を示す貴重な証言写真と考えているとして、沖縄戦を語り継ぐ重要性を訴えた。

（近畿反核医師懇談会）

第19回反核医師の会全国大会のお知らせ

第19回反核医師の会全国大会につきまして、以下の日程で開催いたします。

万障お繰り合わせの上でご参加頂きますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

開 催 日：2023年６月11日（日）　午前10時30分～午後３時（午後は記念講演）

開催会場：東京・新宿・新宿農協会館８階会議室（オンライン併用開催）

主　　催：核戦争に反対する医師の会（反核医師の会）

日　　程

① 午前10時30分～12時：総会を開催

② 午後１時～３時：記念講演：講師・山形英郎氏
名古屋大学大学院国際開発研究科教授
講演テーマ：ウクライナ戦争と国際平和秩序（仮題）

③ その他：ＩＰＰＮＷ世界大会参加者からの報告

参加申し込みは　https://onl.la/iBVvN3N
または右記ＱＲコードよりご登録ください。→

お問い合わせ先
ＴＥＬ：03―3375―5123　ＦＡＸ：03―3375―1862
Mail：panw@doc-net.or.jp
全国保険医団体連合会内反核医師の会事務局・小林まで

会費納入のおねがい

反核医師の会は、会員のみなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。

2023年はIPPNW世界大会第19回全国大会の他、「つどいin北海道」を９月23日～24日に開催するなどの取り組みが予定されています。

2023年度（2023年４月１日～2024年３月31日）の会費納入のほど、よろしくお願いいたします。

個人会員（医師・歯科医師、医学者）　10,000円
研修医（卒後２年まで）　3,000円
医・歯学生会員　1,000円
賛助会員　1,000円

振込先
◇りそな銀行　新都心営業部　普通　１５５７５０２
「反核医師・医学者の集い」
◇ゆうちょ銀行　（他銀行からの振り込みの場合）　〇一九支店
当座　００５６７６４　「反核医師・医学者の集い」
◇郵便振替　００１７０－７－５６７６４　「反核医師・医学者の集い」